
勇者（？）とメイド

まづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者(?)とメイド

【Nコード】

N2054Y

【作者名】

まづき

【あらすじ】

短編『勇者とメイド』の続編になります。

精神衛生上、前作からお読み下さい。「勇者」ただのド変態「警報発令中。総員直ちに戦闘配備。なに？LV50だと？あと49上げてこい！

予想以上にムラムラした青少年となりました。前作で僅かにも勇者に夢見た乙女は退避してください。

世界を作ろうか。(前書き)

エンディングを迎えて解放されてしまった勇者。

世界を作ろうか。

親友は貴族の子息。

僕は酒場のせがれ。

幼馴染みは豪商の娘。

親友は国を守るため。

僕は町を守るため。

幼馴染みは道を守るため。

僕達はそれぞれの旅に出たはずが、いつの間にやら一緒になった。ほんの少しの間に、今まで想像も出来なかった事が、僕ら三人の人生を足しても足りないほど起こった。

後から加わった仲間三人分足してもやっぱり足りないと思う。

竜が突如飛来して王女様を攫おうとしたりとか、聖樹を治す薬を探す旅に出たりとか、聞いた事もなかった（親友も古文書で少し学んだくらいらしい）魔王が僕らの時代に復活したりとか、羽の生えた一族が存在していたりとか、ちょっと手助け（暴走した精霊止めただけだ）したら豪華な船を一隻貰ってしまったりとか、それで世界一周出来てしまったりとか。

少し思い返しただけで僕らの旅って凄かった。

今実家の酒場にいることで、もしかしたら旅なんか出てなかったんじゃないかって思うくらいにとんでもない。

だって何回か死んだ気がするけど結局死んでないし、魔王倒したら魔王の城崩れたはずなのにいつのまにか国に帰ってきてるし、王様から凄い爵位貰ったけど何故か実家に戻ってるし。

少し前の僕は、僕だけど僕じゃなかった。

夢だけど夢じゃなかった！……ごめんよ何故だか言いたいのは昔の感じの名残かも。

でもどっちが僕かもよく分らない。

一瞬に大量の人を殺せる魔王に立ち向かおうって思った僕も、美味しいもの食べたり宿屋で寝るよりも装備をまず買う事に執心してそこらを歩いてる魔物に自らぶつかる僕も。

でもそれを言つと町の人、両親からまずおかしかった。

家に帰ったら毎日同じ食事食べてるし、町中の家と殆ど作りが変わらなかったり、僕が何も食べずにベッドに潜り込んでも何も言わないし、大抵話す事はふたこと。

みんなみんなおかしいけど、みんなも僕も気がつかなかった。

だけど僕は気付いてしまったんだ。

魔王を倒して、祝福を受けて、何かがスツと抜けていく瞬間。

僕は何かを掴んでしまった。

それが知覚か記憶かよく分からないけれど。

僕が何をやってきたか。

さんざん各国の王女やら幼馴染みと仲間のお色気魔法使いに翼族の少女やら。

僕はたくさんさんの女の人に良い顔をして自分に好意を持ってもらえるように振舞っていた事を。

酒場の息子にあるまじき事だ！

気を持たせすぎて雁字搦めになろうとしている。

王女たちは王がさりげなくガードしてくれるので助かるが、一番

怖いのはもちろん幼馴染みだ。

私達お付き合ひしてるわよね？ムードがあちらからバシバシ全身をうつ。

今度おうちに遊びに行ったら帰ってこれない。

おじさんも勇者を婿っていうことに目が通貨になってギラギラしている。

親友も幼馴染みに片想いしていたから彼女の気持ちを応援している、というか僕らが両想いだと勘違いしている。

幼馴染みはもちろん嫌いではない。むしろ反則なほど可愛い彼女が初恋の人だった。

王城に上がって竜から救った事に無邪気に感謝するおしとやかな王女にドキドキしたのも事実だ。

数々の女性たちとそれぞれ胸ときめく時を過ごしてきた。思い返して自分を疑うほどに。

でも、脳をちらつくあの映像にはかなわない。

それは世界を救って初めて得た記憶。

まるで主神マールからのご褒美のように降ってきたもの。

エロい映像だった。

体が前後に動くたびに、彼女のまあ見事にたわわな胸がむにむにと潰れてしまう。

いや潰れずに上へ上へと逃げようと膨れ上がる。

僕は手を添える事も出来ず、彼女の汗で湿った白いブラウスが鎖

骨、胸の谷間へと貼りつき、その張りを浮かび上がらせる様を目の端でしか捉える事が出来ない。おそらくあの薄いお仕着せでは上の黒いエプロンドレスすらも押し上げる乳首が存在を主張しているはずなのに！ああ憎らしい何だこの一点カメラ。動け！あと下に5センチでいい！動け！

腹立たしくも素晴らしい事に、僕はまんじりともせず彼女の顔を馬鹿正直に見て、「こんにちは、メイドさん」を馬鹿の一つ覚えのようになら返しながら彼女を責めたてる、つもりでいる。

彼女は僕の声に一瞬ハツとし、自らの惨状を振り返り、恥じらいに下唇を噛んで回りをそつと窺う。窺っている間に僕にまた押しつぶされて、おそらく潰されただろう乳首の刺激に僅かに跳ね上がる。「は…あつ…」と淫らな溜息を漏らして。

正直旅の間にどこかに捨て去ったのだろうかと不安になるほど性とは縁遠かった生活から、欲望よお帰りなさい、そしてオカズ美味しいです、の青少年の健康生活に随分貢献していただいた。

頬どころか顔から首筋まで紅潮しているし、どれだけ暑いのか記憶からはいまいち伝わって来ないが額から汗が伝って彼女の横髪の先端から流れ落ちるほど汗まみれ。

正直もう美しいと言える状況ではない。

しかしあのきちつとした髪が乱れるその時や、にこやかながらも壁を感じる姿勢が崩れる一瞬、ドロドロに溶けていく思考に抗う姿は、清廉とは真反対で。

堕ちてゆく姿は可哀相なほど魅力的だった。

はつきり言ってしまうえば僕は『綺麗』に食傷気味だったのだ。

か弱いモノを追い詰め、貪り、奈落の底へと引きずり込む、支配者的な悪の誘惑に悪を滅ぼすはずの勇者がかられてしまうという。

世界的にはあってはならない事態。

しかし親友が読んでくれた古文書を僕がまとめるところなる。

『俺がルールだ』

だから僕は今度こそ。

彼女の胸を両手で掴み、揉みしだき。

乳首を辱め、真つ赤な耳を舐めしゃぶり、唾液の伝つ唇をこじ開け。

彼女が恥じらいもなく喘いでしまうまで責めたてる。

そして許される事ならば。

彼女のお仕着せのスカートの中に潜り込み、恥ずかしがってスカートを押さえる彼女の恥部に悪戯を仕掛け、そして遂には。僕の童貞を捧げる所存だ。

さあ。正しいルールを放りだして。

僕と貴女の一時のためにこそ

世界を作ろうか。

世界を作ろうか。（後書き）

勇者の再（不純な目的での）旅立ちでした。

最初はプレイヤーとしての勇者を考えていましたが、トリップや変な世界捻じ曲げを入れたくなかったので、勇者役のキャラクターが解放された後に欲望に走る図を採用しました。

恋したプレイヤーは哀れですが、私はカップルをニヨニヨ眺めるタイプです。

メイドさん攻略までですので数話のお付き合いとなります。

攻略奪取はいまのうちですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2054y/>

勇者（？）とメイド

2011年11月4日03時03分発行